

『正法眼藏抄』口語訳の試み

—— 仏 性 (ハ) ——

伊 藤 秀 憲

第十段

百丈山大智禪師、示^{シテ}衆^ニ云、^{(1)……}仏是最上乘、^{(2)(3)……}是上上智、^{(1)……}是仏道立此人、^{(2)(3)……}是仏有仏性、^{(1)……}是導師、^{(2)(3)……}是使得無所礙風、^{(1)……}は無礙慧。於^{ナリ}後^{コノミ}能^ス使^ス得^ス因果^ヲ、^{(2)(3)……}福智自由^{ナリ}。是作^ワ車運^ニ載^ス因果^ヲ。處^ニ於^ニ生^ニ不^レ被^ニ生^ニ之所^ニ留^ニ、^{(2)(3)……}處^ニ於^ニ死^ニ不^レ被^ニ死^ニ之所^ニ礙^ニ。處^ニ於^ニ五陰^ニ如^シ門開^ル、^{(2)(3)……}不^レ被^ニ五陰礙^ニ。去住自由^ニ、^{(2)(3)……}出入無難^{ナリ}。若能^シ恁麼^{ナレバ}、^{(2)(3)……}不^レ論^ニ階梯勝劣^ヲ、^{(2)(3)……}乃至蟻子之身^モ、^{(2)(3)……}但能^シ恁麼^{ナレバ}、^{(2)(3)……}盡^シ是淨妙国土^{ナリ}、^{(2)(3)……}不可思議^{ナリ}。

これすなはち百丈の道処なり。いはゆる五蘊は、いまの不壞身なり。いまの造次は門開なり、不被五陰礙なり。生を使得するに生にとどめられず、死を使得するに死にさへられず。いたづらに生を愛することなかれ、みだりに死を恐怖することなかれ。すでに仏性の処在なり、動著し厭却するは外道なり。現前の衆縁と認ずるは、使得無礙風なり。これ最上乘なるは仏なり。この是仏の処在、すなはちこれ淨妙国土なり。

仏果ノ上ニハ衆徳可^ニ具足^ニ、更不^レ可^レ有^ニ闕所^ニ、何義何徳カ不^レ備、仍示衆詞ニ仏是最上乘ナリ、是上上智也、是仏道立此人リ、是仏有仏性也トラサマサマ被^レ挙^ニ仏徳^ニ、其中ニ是仏有仏

仏果の上には、多くの徳が具わり満ち足りているはずである。決して欠けたところなどあるはずがない。どんな義、どんな徳が備わっていないであろう。そこで、示衆のことばに、「仏是最上乘、是上上智、是仏道立此人、是仏有仏性」(仏は是れ最上乘なり、是れ上上智なり、是れ仏道立此人なり、是れ仏有仏性なり)などと、

性ノ詞アルニヨリテ、仏性ノタヨリトナルアヒタ被^レ引載^ニ歟、此詞不^ニ普通^ニ、是仏有仏性也ト云ハムモ不^レ被^ニ心得^ニ、然而仏性ノ上ノ道理イツレイカニ談タラムモ不^レ可^レ有^レ苦、又不^レ可^ニ相違^ニ事也、於^レ後^ニ能^ニ使得^ニスレハ因果福智自由也云云、此因果モ非^ニ常因果^ニ、使得無所礙風ノ（一八七a）上因果ナリ、又作^レ車運^ニ載^ニ因果^ニナリ云云、作車ト云モ普通ノ車ノ物ヲ乗テ運載スルニテハアルヘカラス、三車ノ内大白牛車ナリ、是則以^ニ仏性^ニ為^ニ作車^ニ、運載モ運ヒ入、運ヒ出ス儀ニアラス、生モ全機ノ生、死モ全機ノ死ナレハ、不^レ被^ニ所^ニ留^ニ不^レ被^ニ所^ニ礙^ニ之条勿論ナリ、処^ニ於^ニ五陰^ニモ如^ニ門^ニ開^ニ云云、五蘊ハ色受想行識是ナリ、是モ仏性上五蘊也、如^ニ門^ニ開^ニ者不^レ被^ニ所^ニ礙^ニ之儀也、去住自由出入無難ナリ云云、尤有^ニ其謂^ニ、仏性上自由出入（一八七b）無難、実有^ニ何煩^ニ、若能恁麼不^レ論^ニ階梯勝劣^ニ、乃至蟻子之身、但能恁麼、尽是淨妙国土、不可思議也云云、所詮蟻子者アリナリ、蟻子ハ国土ヲ所住トシテ、蟻子ハ生タル物ニテコソアレ、ヤカテ蟻子身ヲヲサヘテ、淨妙国土不可思議ト談^ニ之也、又五蘊ハ今ノ不壞身也、イマノ造次ハ門開ナリ、不被五陰礙也云云、打任ハ五陰ハ不壞身ナルヘカラス、然而仏性ノ上ノ五蘊ナリ、然

『正法眼藏抄』口語訳の試み（伊藤）

いろいろ仏徳を挙げられた。その中に、「是仏有仏性」のことばがあることから、仏性（を理解する上で）の手掛かりとなるゆえ、引用して載せられたのか。このことばは、広く一般には通じない。「是れ仏有仏性なり」と言うのも理解できない。そうではあるが、仏性の上の道理を、いずれにせよ、どのように説いたとしても、なやむ必要はない。また、相違するはずがないことである。「於後能使得因果、福智自由」（後に能く因果を使得すれば福智自由なり）とある。この「因果」も、常の因果ではない。「使得無所礙風」の上の因果である。また、「作^レ車運載因果」（車と作して因果を運載す）とある。「作車」と言うのも、普通の車が物を乗せて運載することではあるはずがない。三車の内の大白牛車である。⁽⁵⁾これは「仏性」を「作車」とするのである。「運載」も運び入れたり運び出したりすることではない。生も全機の生、死も全機の死であるので、「不^レ被^ニ所^ニ留^ニ」（留められず）「不^レ被^ニ所^ニ礙^ニ」（礙えられず）のことはもちろんである。「処^ニ於^ニ五陰^ニ如^ニ門^ニ開^ニ」（五陰に処して門の開るが如し）とある。「五蘊（陰）」は色受想行識である。これも仏性の上の「五蘊」である。「如^ニ門^ニ開^ニ」（門の開るが如し）とは、「不^レ被^ニ所^ニ礙^ニ」（礙えられず）のことである。「去住自由、出入無難」とある。特にその理由がある。仏性上の「自由、出入無難」であって、実にどんな煩悩があるうか。「若能恁麼、不^レ論^ニ階梯勝劣^ニ、乃至蟻子之身、但能恁麼、尽是淨妙国土、不可思議」（若し能く恁麼なれば、階梯勝劣を論ぜず、乃至蟻子の身も、但だ能く恁麼なれば、尽く、是れ淨妙国土、不可思議なり）とある。つまるところ「蟻子」とは「あり」である。「蟻子」は「国土」を住処としており、蟻子は生き物である。まさに「蟻子」の「身」をとりおさえて、「淨妙国土、不可思議」と説くのである。また、「五蘊は、いまの不壞身なり。いまの造次は門開なり、不被五陰礙なり」とある。普通一般に

者不壞身ナルヘキ条無^レ疑^{ウツカイ}、造次モ実門開ナルヘシ、故無礙風ナリ、此（一八八a）道理上ノ上ハ生ヲ愛シ死ヲ恐怖スルコト実背^レ理歟、已仏性ノ所在也ト被^レ決処在ノ詞ソ、能在モ可^レ在歟ト聞ユレトモ、只仏性ノ上ノ処在ナリ、現前ノ衆縁ト認^ユスルハ、使得無礙風也云云、是モ只現前ノ衆縁行住坐臥ノ進止動揺皆^{ヨウ}是使得無礙風ノ道理ナリトナリ、是最上乘ナル是仏也云云、コノ是仏ノ処在、則是淨妙国土ナリ云云、此是仏ト云モフトイテキタル様ナル詞ナレトモ、最上乘仏性也（一八八b）ナムト云程ノ詞ナリ。

今談ニ仏性義ニスルニ雖^レ有^ニ段々各無^ニ勝劣一、只同事ヲノフルナリ、先ノ詞ノ替タレハトテ無^ニ差別一タトヘハ仏十号マシマス、各有^ニ謂然而非^レ有^ニ勝劣善惡一也、

仏是最上乘ト云ハ、五乗^{人天声聞縁覺菩薩是五乘也（？）}ニ勝タル故ニ云ナリ、最上乘ヲ以テ因果福智作車運載ヲモ心得ムスルトキニ、衆生ノ作業ニテハアルマシキ也、上上智ト云ハ上ノウヘニ上ヲ立ルコトハ、法文ノ理ヲノフルニハ詞ノ猶タラヌ事（一八九a）アリ、五乗ノ上ノ上乘ハ下ニ対シタル方アリ、仍上上ト云事アリ、又上トナツクルコトモ下ニタイシタル事アリ、無上

は、「五陰」は「不壞身」であるはずがない。そうではあるが、仏性の上の五蘊である。そうだとすれば、「不壞身」であろうことは疑いない。「造次」（わずかな間のふるまい）も実に「門開」であるはずである。だから「無礙風」である。この道理であるからには、「生を愛」し、「死を恐怖する」ことは、実に理に背くか。「すでに仏性の処在なり」と決定された「処在」（あり場所）のことばは、能あるべきかと受け取られるけれども、ただ仏性の上の「処在」である。「現前の衆縁と認ずるは、使得無礙風なり」とある。これも、ただ「現前の衆縁」、行住坐臥の進止動揺、皆これは「使得無礙風」の道理であると言うのである。「これ最上乘なる是仏なり」とある。「この是仏の処在、すなはちこれ淨妙国土なり」とある。この「是仏」というのも、突然出て来たようなことばではあるけれども、「最上乘」「仏性」であるなどと言うほどのことばである。

この「仏性の巻では」仏性の意味を説くのに、各段があるけれども、それぞれ勝劣はない。ただ同じことを述べるのである。以前の「段の」ことばが替ったからといって、違いはない。例えば、仏には十号がおりになるが、それぞれにいわれがある。しかし、勝劣・善惡があるのではないのである。

「仏是最上乘」と言うのは、五乗（人・天・声聞・縁覺・菩薩が五乗である）に比べて、仏は「勝っているから」、「このように」言うのである。「最上乘」によって「因果福智」「作車運載」をも理解するときには、「それらは」当然衆生の行為ではないのである。「上上智」と言うのは、上の上に上を立てることば（である）。法文の理を述べるには、ことばがそれでも足りないことがある。五乗の上「という意味で」の上乗では、下に対して一面がある。そこで「上上」ということがある。また、上と名付けることも、下に対して「名付けて」いることが

ノ詞ニハ無下モアラハルナリ、最上乘モ上
上智モヲホキナル事ナリ、大大超ト云事モア
リ、
仏道立此人ト云ハ、本分人ナリ、仏有モ仏
性、只仏ノ名、本分ノ事ナリ、
仏有トイフコトハ、コノトキハシメテキコユ
ルニ似レトモ、悉有ノトキ事フリヌルナリ、

使得ト云ハ是仏ノ使得也、ツカヒウルナリ、
(一八九b)ノコル所ナキ義也、使得無所礙
トイハムニコトタリヌヘシ、風トイフ字何事
詮哉、コレハタタツネニ無所礙風トイヒナラ
ヒタル詞ナレハ、無礙ト云字ニ付テ風トイフ
トハイフ、非ニ風大切也、仏性ノ海ナムトイ
フ、別ニ海ノ字ノ大切ナルニアラサル程ノ事
也、

無所礙風ト云、コレ仏ノ徳、仏ノ理ナリ、解
脱ノ上ハサヘラレサルナリ、但風ハ世間ニ障
リナキ物ニツカフユヘニ無所礙風トイヒ、海
ハヒロキコトニツカフユヘニ仏性ニツクルナ
リ、コレヲ聯有故、(一九〇a)

無礙慧ト云ハ是モ仏ノ智慧ナリ、サハルトコ
ロナキ智慧也、

於後能使得因果福智自由ト云、此後ト云ハ

『正法眼藏抄』口語訳の試み(伊藤)

ある。無上のことばには、「無上に対する」無下もあらわれるのである。「最上乘」も「上上智」も、大きいということである。大大超ということもある。

「仏道立此人」というのは、本分人である。「仏有」も「仏性」であり、ただ仏の名、本分のことである。

「仏有」ということは、このとき初めて知られたようであるけれども、「悉有」のとき言いふるされたのである。「第一段には「悉有は仏性なり」とあったが、「仏有」は「仏性」であるので、「悉有は仏有なり」と言えるからである。」

「使得」というのは、これは仏の「使得」である。「使い得る」のであって、残るところがない意味である。「使得無所礙」と言うことで十分であるはずである。「風」という字は、どのようなことを説くのか。これは、ただ常に「無所礙風」と言い慣れていることばなので、「無礙」という字にちなんで「風」と言うというのである。風が大切ではないのである。「第一段では」仏性の海(仏性海)などという。「この場合も」特に海の字が大切であるのではないほどのことである。

「無所礙風」というのは、仏の徳、仏の理である。解脱しているからには、礙げられないのである。もっとも、風は、世間では障りがないもの「の喩」につかうから「無所礙風」と言い、海は広いこと「の喩」につかうから、「仏性海」というように「仏性に付けるのである。これらは幾らか理由がある。

「無礙慧」というのは、これも仏の智慧である。礙げられない智慧である。

「於後能使得因果、福智自由」とある。この「後」というのは、前後の後で

非前後ノ後、無礙慧ノ上ヲ後トサスナリ、後ヲハコニト可_レ読歟、如何、コノコトハサキノ無所礙風ヲ無礙慧ソノ道理ニハ不相応ニキコユ、世間ノ詞ニ似タリ、梵網經ニモ非因果法トアリ、然而仏ノ上ニヲイテ因果ヲタツルトキ仏因果也、又大乗因者諸法実相也、大乘果者（一九〇b）亦諸法実相也ノ道理也、仏ハ非因非果トトク、ヤカテソノ非因非果ヲ、イマココニハ因果福智自由トトクナリ、作車運載ト云ハ因果ヲトク詞也、因果ハ運載ノ義ナリ、運載ハハコフ義ナリ、イマ因果ヲハ仏法ニハイカニトハコフヘキソ、東ヨリ西ヘハコヒ、過去ヨリ未来ヘハコフニテハナシ、諸法ノ実相ナルカコトク、大乘ノ因ヲハコヘハ大乘ノ果ナルコトク、タタヲナシキ上ニハコフトハトカルルナリ、運載因果ノ詞ヲ、タタイタツラニモノヲハコフカ（一九一a）如ク心得レハ、右ノ上上智ノ詞モ、仏道立此人ノ詞モ、仏有仏性ノ詞モ、導師ノ詞モ本意ニハソムキ、道理ニハソルル也、ハコフト云事、今ニハシメス、現成公按ニモ、自己ヲハコムテ萬法ヲ修証ストイフモ、萬法スナハチ自己ナル道理也、下ニ対シタル上上智ニアラス、仏道立此人トイフモ、今仏道ヲ建立ノ人トニハアラス、導師ト云モ誰人ヲミチヒク

はない。「無礙慧」であることを「後」と指すのである。「後」を「ここに」と読むべきか。どうであろうか。このことばは、先の「無所礙風」を「無礙慧」だという道理には不相応に受け取られる。世間のことばに似ている。『梵網經』にも「非因果法」⁽⁸⁾とある。そうであるから、仏の上において因果をたてるときは、仏因果である。また、「大乘因者諸法実相也、大乘果者亦諸法実相也」⁽⁹⁾（大乘の因とは諸法実相なり、大乘の果とは亦諸法実相なり）という道理である。仏は「非因果」と説く。そのまま、その「非因果」を、今、ここでは「因果福智自由」と説くのである。

「作車運載」というのは、「因果」を説くことばである。「因果」は「運載」の意味である。「運載」は「運ぶ」意味である。今、因果を仏法では、どのようにして運ぶべきか。東より西へ運び、過去より未来へ運ぶのではない。諸法の実相であるように、大乘の因を運べば、「それが即ち」大乘の果であるように、ただ同じ上に運ぶと説かれるのである。「運載因果」のことばを、ただ無用に物を運ぶことのように理解すれば、右の「上上智」のことばも、「仏道立此人」のことばも、「仏有仏性」のことばも、「導師」のことばも本意に背き、道理にそれるのである。「運ぶ」ということは、今が最初ではない。現成公按の巻に、「自己をはこびて方法を修証す」と言うのも、方法が即ち自己である道理である。下に對した「上上智」ではない。「仏道立此人」というのも、今、仏道を建立するところの人というのではない。「導師」というのも、だれを導くのか。能化（導く人）所化（導かれる人）は仏道ではおかない。「導師」もこれくらいに理解すべきである。能化所化をたてることがあっても、以前教化せられなかったものが、今、教化せられるとは理解しないのである。

ソ、能化所化ハ仏道ニヲカス、導師モコレ程ニ心得ヘシ、能化所化ヲタツルトキアレトモ、モト化セラレサリツルモノノ（一九一b）イマ化セラルトハ心得ヌ也、

〳〵於生ニ不被_レ生之所_レ留、〳〵於死ニ不被_レ死之所_レ礙ト云ハ、我等カ生死ニハアラス、仏ノ事也、抑仏ノ去住出入イカヤウナルヘキソ、我カコトクハアルヘカラス、去モ不変ノ義也、住モ行ニ対シタル住ニハアラス、ユヘニ自由トツカフナリ、出入モ亦如此、

生モ死モ不被_レ留、或ハ不被_レ礙トトク、去住出入無難ト云モ仏果ノコトナレハ、我等カ得分ナシ、只謗ノ詞ヲ聞シカ如シ、我トシテ自己ト（一九二a）ココロウルハ、生死ニモ被_レ留被_レ礙出入モ難ナリ、全機現ノ生死ナルヘシ、¹⁰

コレ去来ニアラサル生死ナルユヘニ、凡悩即菩提トイフ詞ト、凡悩トシテ断ヘキナシ、菩提トシテアラハスヘキナシトイフ詞ト一ナリ、其故ハ凡悩ノ置所ナシ、菩提モ又置所ナシ、ユヘニヒトシキナリ、

使得ト云ハ生也全機現ト心得ヲイフナリ、我ト云テ自己ト心得ハ、生死ニ被_レ留被_レ礙出入モ難アリ、全機現ノ生死ナルヘシ。¹⁰（一九二b）

『正法眼蔵抄』口語訳の試み（伊藤）

〳〵「〳〵於生ニ不被_レ生之所_レ留、〳〵於死ニ不被_レ死之所_レ礙」（生に〳〵して生に留められず、死に〳〵して死に礙えられず）というのは、我々の生死ではない。仏のことである。そもそも、仏の「去住」「出入」はどのようなべきか。私の「去住・出入」のようにはあるはずがない。「去」も不変の意味である。「住」も行に對した住ではない。だから「自由」と使うのである。「出入」も、また同様である。

〳〵「生」も「死」も「不被_レ留」（留められず）或いは「不被_レ礙」（礙えられず）と説く。「去住」「自由」、出入無難」というのも仏果のことであるから、我々のとり分はない。ただ謗のことは聞いたようなものである。我をもって自己と理解するのは、生死にも留められ、礙えられ、出入も難しいのである。全機現の生死であるはずである。

〳〵「去来」ではない「生死」であるから、「煩惱即菩提」ということばと、「煩惱」として断すべきものもないし、菩提としてあらわすべきものもない」ということばとは一つである。その理由は、煩惱として置くところがないし、菩提もまた置くところがない。だから等しいのである。

〳〵「使得」というのは、「生也全機現」と理解することを言うのである。我と言つて、「それを」自己と理解するのは、生死に留められ、礙えられ、出入も難かしい。全機現の生死であるはずである。

処ニ於五陰ニ如ニ門開、不_レ被_ニ五陰礙_一トイフ、
五陰ト云ハ我等身ニアラス、門ノヒラクルト
ハ不_レ被_ニ礙_一止_二也、サヘラレスト云ハ上、ノ
無礙自由ナムトトカルル心地ナリ、

去住自由出入無難ト云、是如_レ文、已前ノ義
共ナリ、自由全出全入ナリ、

若能_ニ恁麼、不_レ論_ニ階梯勝劣_一、乃至蟻子之身、
但能_ニ恁麼、尽是淨妙国土、不可思議トイフ、
恁麼ナラハトアルハ、右ノ最上乘ヨリ去住自
由出入無難マテヲサス、ユヘニ階梯（一九三
a）勝劣アルヘカラス、ユヘニ蟻子ノ身モ淨
妙国土不可思議トイハルナリ、イカニイハ
ンヤ我等劣ナリトテモラスヘカラス、

蟻子ノココニ用ナルニハアラス、最下ノタト
ヘニイタサル、担任タル詞ナラハ、蟻子モ仏
ソナムト云ヘケレトモ、淨妙国土トアルハ、
仏ノ身土不二トカセヲハシマス心地ナリ、

イハユル五陰⁽¹²⁾ハ、今ノ不壞身也ト云、此今ノ
トイフ今ハ、仏法ノイマナルヘシ、我等カ上
ヲイマトハササス、五陰⁽¹²⁾ト聞マテハ壞身トコ
ソ覺ルヲ、（一九三b）不壞身ト云ヘハ首尾
不相_レ應_二キコユレトモ、仏法ノ上ハ勿論ナリ、

「処ニ於五陰ニ如ニ門開、不_レ被_ニ五陰礙_一」（五陰に処して門の開るが如し、五陰に礙
えられず）とある。「五陰」というのは、我々の身ではない。「門のひらくる」（門
開）というのは、礙え留められないのである。「礙えられず」（不被礙）というの
は、上の「無礙」「自由」などと説かれる意味あいである。

「去住自由、出入無難」（去住自由にして、出入無難なり）とある。これは文の通
りである。以前の意味である。「自由」「全出」「全入」である。

「若能恁麼、不_レ論_ニ階梯勝劣_一、乃至蟻子之身、但能恁麼、尽是淨妙国土、不可
思議」（若し能く恁麼ならば、階梯勝劣を論ぜず、乃至蟻子の身も、但能く恁麼ならば、
尽く是れ淨妙国土、不可思議なり）とある。「恁麼ならば」とあるのは、右の「最上
乗」より「去住自由、出入無難」までを指す。だから「階梯勝劣」はあるはずが
ない。だから「蟻子之身」も「淨妙国土、不可思議」と言われるのである。「蟻
でさえそうであるから」ましてや、我々は劣っていると云って、洩らすべきでは
ない。

「蟻子」がここで必要であるのではない。最下の「ものの」例えに出されたの
である。普通一般のことばであるならば、「蟻子も仏だ」などと言うべきである
けれども、「淨妙国土」とあるのは、仏が「身土不二」とお説きになる意味あい
である。

「いはゆる五蘊⁽¹²⁾は、いまの不壞身なり」とある。この「いまの」という「い
ま」は、仏法のいまであらう。我々のことをいまとは指さない。「五蘊⁽¹²⁾」と聞く
限りは、壞身と思われるのに、「ここでは」「不壞身」というので、首尾不相_レ應に
聞こえるけれども、仏法の上からは、言うまでもないことである。更には、ま
た、関係のないことを聞くように思われる。結局、吾我を離れてしまったら、諸

サテハ又ヨソノ事ヲ聞カ如ク覺ユ、所詮吾我ヲハナレヌレハ、モロモロノ壞身ハ皆不壞身ナルヘシ、一切衆生悉有仏性ナルユヘニ、

イタツラニ生ヲ愛スル事ナカレ、ミタリニ死ヲ恐怖スル事ナカレト云ハ、愛スルトイヒ恐ルト云ハ、世間ノ生死ヲ心得トキノ義也、イマハ仏道ノ生死ノコトナレハ、愛モ恐モアルヘカラス、生ノ生ヲトクトキ愛スルキアルヘカラス、生也全(一九四a)機現ノユヘニ、死ノ死ヲトクトキ恐ルル事アルヘカラス、死

ヤ全機現ノユヘニ、吾我ノ身ナキトキ無礙風ノ道理モアラハレ解脱スルナリ、

ステニ仏性ノ処在ナリ、動著シ厭却スルハ外道也ト云、此処在ハ能所ノ義ニアラス、処在ハヤカテ仏トサスナリ、悉有カ仏性ナルカ如シ、仏性ノ処在ハコレ衆生ナルヘシ、

仏ハ正報ニテ国土ハ依報ナリトハ心得ヌナリ、仏ヲ国土トモトリ、国土ヲ仏トモイフヘシ、(一九四b)仏ノ往来セムトキ、国土トモニ往来スヘシ、国土ヲ東ニ置テ仏ハ西へ行トハユメユメ心得マシ、我ハ日本国ノ物ナレトモ、身独震旦ヘワタルトハイフヘカラス、不レ可レ似ニ凡夫、ユヘニ動著シ厭却スルハ外道ナリトミエタリ、

現前ノ衆縁ト云ハ、我等カ事ヲ云様ナリ、然

『正法眼蔵抄』口語訳の試み(伊藤)

の壞身は、皆「不壞身」であるはずである。一切衆生悉有仏性であるから。

「いたづらに生を愛することなかれ、みだりに死を恐怖することなかれ」とあるが、「愛する」と言い、「恐る」と言うのは、世間の生死を理解するときの道理である。ここでは仏道の生死のことであるので、「愛」も「恐」もあるはずがない。生が生を説くとき、愛するという道理があるはずがない。生也全機現の理由から。死が死を説くとき、恐れることがあるはずがない。死也全機現の理由から。吾我の身がないとき、「無礙風」の道理も現われ、解脱するのである。

「すでに仏性の処在なり、動著し厭却するは外道なり」とある。この「処在」は能所の意味ではない。「処在」がそのまま仏であると指すのである。悉有カ仏性であるのと同じである。「仏性の処在」は衆生であるはずである。

「仏は正報であって、国土は依報であるとは理解しないのである。仏を国土とも受け取り、国土を仏とも言うべきである。仏が往来するとき、国土も一緒に往来するはずである。国土を東に置いて、仏は西へ行くと、決して決して理解してはならない。我は日本国の人間であるけれども、身のみ中国へ渡るとは言えない。凡夫「の考え」に似るはずがない。だから、「動著し厭却するは外道なり」とあるのである。

「眼前の衆縁」というのは、我々のことを言うようである。そうではあるが、

而ココニハ無礙風トトカレヌレハ、現前ノ衆縁トハ仏法ノ衆縁ナル故ニ、無礙風トトカルルハ仏性ノ処在ナルヘシ、我等カ五陰ヲ強⁽¹²⁾為シテ衆縁トモ不壞身トモイフニハアラス（一九五a）

抑仏性ノ処在ト云事、頗^{スゴ}所所ニキラヒツル詞也、イマ非^レ可用キコユレトモ、コレハ又其儀ニハアラス、処在ハ仏性ノ全面ヲトクユヘナリ、

使得無礙風仏ノ処在淨妙国土也、已前ノ義ニ見タリ、生ヲ使得ト云ハ生也全機現也、死ヲ使得スルトイフ又同シ、生ヲ愛セサルハ全生也、死ヲ恐怖セサルハ全死ナルヘシ、

所詮此段ハ是仏有仏性ヲトルナリ、最上乘、上智、仏道立此人、導師、使得無礙風、無礙慧、仏ノ各各徳詞アマタナレ（一九五b）トモタタ仏トトクナリ、後ニ能ク使得トアルトキイツレモ仏ノ上ノ事ナレハ、因果モ福智モ自由ナリ、世間ノ作業ニアラス、生死トハアレトモ全機現ナレハトメラレス、サハラレストアル上ハ、又我ラカコトクノ生死ナラス、五陰ニ所ストハアレトモ門ヒラケヌ、コレ解脱ナリ、ユヘニ五陰ニモサヘラレス、去モ住ス

ここでは「無礙風」と説かれたので、「現前の衆縁」とは仏法の衆縁であるから、「無礙風」と説かれるのは「仏性の処在」であるはずである。我々の五蘊⁽¹²⁾を無理して「衆縁」とも「不壞身」とも言うのではない。

「そもそも「仏性の処在」ということは、多くあちらこちらで斥けたことばである。ここでは、用いるべきではないと受け取れるけれども、これは、またそのことではない。「処在」は、「仏性のあり場所の意味ではなく」仏性の全面を説くからである。

「使得無礙風」「仏の処在」「淨妙国土なり」。以前の道理に見た。「生を使得」というのは生也全機現である。「死を使得する」というのもまた同じ「く死也全機現」である。生を愛しないのは全生である。死を恐怖^{おそれ}ないのは全死であるはずである。

結局、この段は、「是仏有仏性」をとるのである。「最上乘」「上上智」「仏道立此人」「導師」「使得無礙風」「無礙慧」。仏のそれぞれの徳を表わすことばは多数あるけれども、ただ仏と説くのである。「後に能く使得」（於後能使得）とあるとき、どれも仏についてのことであるから、「因果」も「福智」も「自由」である。世間の行為ではない。生死とはあるけれども、全機現であるので、「とどめられず」「さへられず」とあるからには、また、我々のような生死ではない。「五陰に処す」（処於五陰）とはあるけれども、門が開けた（門開）。これが解脱である。だから、五陰にも礙えられないし（不被五陰礙）、去るのも住するのも（去住）難しいことはない（無難）。

ルモカタキ事ナシ、

如^レ此云ヘトモ、真実ニ法文ノ道理ニ落居ス
ルトキハ、世間ノ作業ヲハ不^レ取、因果福智
(一九六a)自由ナレハトモイヒ生死モ我等
カ生死ニアラス、全機ノ上ナリナムト云ヘ
ハ、仏道与^ニ世間^一タテワケテキコユ、マコト
ニ世間ノ方ヨリハ仏道ヲハハルカニヘタツレ
トモ、仏法ノ方ヨリハ世間トテノソク事ナケ
レハ、只六借^{ムツカシ}ク世間トエリワケテノケスト
モ、因果福智自由也、生死ニモトメサヘラ
レス、五陰門ヒラクト心得ルカ正説ナル也、
恁麼ナレハ不^レ論^ニ階梯勝劣^一、乃至蟻子之身、
但能恁麼ナレハ、尽是淨妙国土、不可思議也
ト被^ニ結了^一、タタ五陰⁽¹²⁾ハ不^レ壞^{フセ}(一九六b)身、
造次^{ツラシ}ハ門開ト心得ヘシ、(一九七a)

へこのように言うけれども、本当に法文の道理に決着するときは、世間の行為を
とらない。「因果福智自由」であるからとも言い、生死も我々の生死ではない、
全機の上「での生死」であるなどと言うので、仏道と世間とを区別して受け取
る。実に、世間の方からは、仏道を遙かに隔てるけれども、仏法の方からは、世
間と言って除くことがないので、ただ難しく世間と「仏法と」を選び分けて除き
去らなくても、「因果福智自由である。生死にも留められないし、礙られない。
五陰の門が開く」と理解するのが正説であるのである。「恁麼、不^レ論^ニ階梯勝劣^一、
乃至蟻子之身、但能恁麼、尽是淨妙国土、不可思議」(恁麼なれば、階梯勝劣を論ぜ
ず、乃至蟻子之身も、但能く恁麼なれば、尽く是れ淨妙国土、不可思議なり)と結ばれ
た。ただ「五蘊⁽¹²⁾」は「不壞身」、「造次」は「門開」と理解すべきである。

(1) 『天聖広燈錄』卷九 百丈懷海章(統藏一三五・三三四b) 但し、『広燈錄』は、「是上上智」を「最上上智」とし、「是仏道立此人」を「是仏道上立此人」とし、また「恁麼」を「潛麼」とする。

(2) 「後」を、『抄』は「ノチニ」と振り仮名を付けるが(一八六b、一八七a)、『聞書』は「後ヲハココニト可^レ読歟」(一九〇b)とするから、「ココニ」と読むことにした。

(3) 『抄』は「使^ニ得因果福智^一自由、是作^レ車運載因果^{ナリ}」と読んでいるが(一八六b)、これは採らなかった。

(4) 『全集』は「これ」を欠くが、『抄』(一八八b)によって補った。

(5) 『妙法蓮華經』譬喻品第三で説かれる羊鹿牛の三車の内、牛車と大白牛車とが同一か異なるかは、古来問題とされて来た。同一とするものが三車家であり、異なるとするのが四車家である。天台宗は後者の立場をとる。ところで『抄』は、「三車ノ内大白牛車ナリ」と、大白牛車は三車の内の牛車に相当するとし、明らかに天台の解釈とは異なる。經豪の師詮慧の『聞書』には、天台の用語が多く見

られる。詮慧は叡山で学んだから当然と言えば当然であるが、しかし、決して天台の解釈には流されることはなく、天台の用語を用いつつも、天台的解釈を否定することによって、『正法眼蔵』で説くところを明らかにしようとしている点に注意する必要がある。これは、弟子の経豪にも受け継がれ、このような大白牛車の解釈となつて表われたと思われる。

(6) 原文には「所在」とあるが、これは本文を引いたのであるから「処在」とすべきであろう。訳文では改めた。

(7) 頭註としてあったものを、印刷の上から割註に改めた。

(8) 『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品』卷一〇下

是故戒光從_レ口出。有_レ緣非_レ無_レ因。故光光非_二青黃赤白黑_一、非_レ色非_レ心、非_レ有非_レ無、非_二因果法_一。是諸仏之本源菩薩之根本、是大衆諸仏子之根本。(正藏二四・一〇〇四b)

(9) 『妙法蓮華經玄義』卷九下

普賢觀云、大乘因者諸法実相、大乘果者諸法実相。(正藏三三・七九四b)

『觀普賢菩薩行法經』

汝今応_二當觀_二大乘因_一、大乘因者諸法実相。(正藏九・三九二b)

(10) 両文はほぼ同文と言ってよい。何故、同文があるのかは不詳であるが、改めて並記すれば次のようである。

我トシテ自己トココロウルハ、生死ニモ被_レ留被_レ礙出入モ難ナリ、全機現ノ生死ナルヘシ、

我ト云テ自己ト心得ハ、生死ニ被_レ留被_レ礙出入モ難アリ、全機現ノ生死ナルヘシ、

(11) 『聞書』は「止」の字を用いるが、「生不被生之留」「死不被死之礙」と本文にあるから、「留」を用いた方がよいと考え、訳では改めた。

(12) 『聞書』は「五陰」とするが、これは引用文中の「処於五陰、如門開。不被五陰礙」の「五陰」によって、用語を統一したものと思われる。『全集』『抄』は「五蘊」とするから、『聞書』の原文はそのままとして、訳では「五蘊」に改めた。